

「夢と笑顔のあふれるまちづくりを支える教育」



先人の知恵と、人々のつながりを活かして・・・
そのキーワードは、

『連携』

今回の特集では、主に社会教育に視点を当ててお知らせします。

Chapter 1
社会教育アラカルト

はじめに、「社会教育って、何?」といった素朴な疑問にお答えします。

社会教育とは?

明確な定義はありませんが、社会教育とは、「学校外の教育活動として、社会において、子どもから大人まで一生涯を通じて、あるいは生涯の各時期において、組織的に行われる教育活動」ということができます。

具体的にどんなもの?

社会教育をおこなうための施設や機関、関係団体があります。代表的なものはコーラス教室や畑づくり講習会を開設している公民館です。公的機関としては教育委員会などの行政機関、関係団体としては民間の非営利団体であるPTAや老人会、趣味やスポーツ、ボランティアの団体、最近ではNPO法人なども含まれます。

生涯学習と社会教育は違う?

同じような意味に捉えられがちですが、イコールではありません。社会教育が組織的に行われる教育活動なのに対し、生涯学習は学びの総称で、いつでもどこでも、個人でも団体でも、公も民も営利の有無も問わず成立する非常に幅広い学習活動です。社会教育における学習も学習者の側から見れば生涯学習の一つといつことになります。

学社連携・融合とは？

学校の教育活動と社会教育事業を抱き合わせ、双方にメリットをもたらす、「学校教育でもあり社会教育でもある」そういった部分を広げていこうという取組です。この考え方は、現在の「学校、家庭、地域の連携」に発展しています。

地域が一体となって子どもを育てる

学校の先生は、「子ども達を育てたい」と一生懸命です。その意気込みや責任感はとても大事ですが、子育ては学校だけで完結するものではありません。家庭があり、保育所があり、地域の中での生活もあります。学校教育だけでは限界があります。学校、家庭、地域が互いに連携協力することで、限界を広げることが可能です。

地域となぜ連携するのか？

学校や家庭、地域の教育力が低下してきていると言われています。これには、あまりにも著しい科学技術の進歩や経済社会の発展、情報化、国際化などに、教育界をはじめ社会全体が対応しきれなかったことが大きな要因と考えられます。教育力を現代に見合うところまで高めるためには何らかの手立てが必要です。地域との連携により、地域の人たちが子どもと関わることを通じて子どもの現状を知り、自分



たちがやらなくてはいけないことに気づき、地域の教育力が高まる。その教育力は学校や子どもだけでなく、関わった人々自身にも還元されることとなります。

どのように連携していくか？

学校における地域との連携は以前からその必要性が重要視されてきたことから、学校規模や行政区が小規模な西ノ島町にあつては、地域性やそれまでの伝統と相まって、学校独自に強力な連携を図っています。「ふるさと教育」も公民館等と連携して地域に根ざした活動が行われています。また、学校支援ボランティアの活用も進んできました。今後、この連携の仕組みを体系化し拡大させていきます。※以上の本文は隠岐教育事務所報第387号より引用しました。

学校・家庭・地域の連携は1980年代から一貫した教育政策



Chapter 2 中央公民館事業

「夫(ぶ)の精神(こころ)」再生プロジェクト

まきはた 牧畑がつなぐ人と人

「夫(ぶ)の精神(こころ)」に学ぶ

皆さんは、牧畑というものをご存知でしょうか。牧畑は、隠岐諸島で、昭和35年頃まで営まれていた、放牧と畑作を4年で輪作する、世界的にもユニークな農法です。島の急斜面で、狭い土地を有効利用するために考え出されたとされています。

高さ1.5メートルの石垣で、「牧」と呼ばれる4つの区域に分け、それぞれに、1年目は放牧、2年目から麦・大豆・粟などを1年ごとに栽培、4年で一巡します。

牛のふんを肥料にし、同じ作物を2年連続で耕作しないことで、土地がやせるのを防ぐ工夫をしています。これらは、島で生き抜くために考え出され、私たちの祖先が受け継いできました。

その労働は「夫」と呼ばれる共同作業によって成り立ってきました。牛や馬を所有していない世帯でも草刈りや石垣積みの作業に参加し、牧畑から得られる恩恵を分け合って生活してきたのです。それは持続可能な循環型農法です。



私たちのまちを、これからも永遠に次の世代に受け渡していくためには、牧畑で培われてきた「夫の精神」をもう一度見直し、若いも若きも、男も女も、こそって、夢と笑顔のあふれるまちづくりに参加する必要があると考えました。